
木漏れ日の下で

縁異

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木漏れ日の下で

【Nコード】

N2084S

【作者名】

縁異

【あらすじ】

アフタヌーンティーを優雅に楽しむ美女の親子。2人は木漏れ日の下で、ケーキの甘さに魅了されていた……………

「ねえ、お母様。 どうしてケーキはケーキと言うのでしょうかね」

ある昼下がり、アフタヌーンティーを楽しんでいた少女は、向かい側に座る母親に訊いた。

「さあ。 私にも分からないわ」

少女の、大人には持ち得ない視点で浮かんだ疑問に、母は答えられない。

「じゃあお母様。 どうしてケーキはこんなに人を魅了するのでしょうかね」

ショートケーキにフォークの側面を食い込ませて、少女は訊いた。

「さあ、分からないわ」

でも、と、母親は続ける。

「本当に、不思議な食べ物よね。 こんなにも、人を惹き付けるなんて」

「ただ砂糖がふんだんに使われてるだけなのにね」

「砂糖だけじゃないけど……確かに、特別なものは何も使われていないのにな」

「本当ですわ。 フッフ」

木漏れ日が、2人の顔をさす。

少女の顔は、幼げながらも美しかった。
母親の顔も、妖艶な美しさを持っていた。
アフタヌーンティーを楽しむ2人は、どちらも美女と呼ばれる親子だった。

「でもお母様」

「？」

「私はやっぱり、お肉の方が好きですわ」

「あら、この子ったら。誰に似たのかしら」

ケーキを食し終えた2人は、紅く染まったティーに手をつける。

「お父様にきまっていますわ」

「あらあら。あの人ったら」

「そういえば、お父様はどちらにおいでになっているのでしょうか」

「あら、気付かなかったのかしら？」

その姿は気品に溢れており、2人の美しさはさらに際立っていた。
そこに紳士諸君がいたならば、間違いなく2人の姿に心を惹かれて
いただろう。

そう、まるで2人はケーキのような存在だった。

「昨日のステーキ、あれはお父様のものよ」

「なるほど！ だから昨日のステーキは格別な美味しさだったので
すわね！」

まあ、結婚したところで、体を裂かれて肉料理になったり、眼球
をショートケーキの苺の代わりに乗せられたり、血を紅茶に混ぜら
れたり、録な扱いを受けないのが目に見えているが。

(後書き)

結局何がしたかったんだ俺は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2084s/>

木漏れ日の下で

2011年10月6日17時09分発行